

(何がすみませんだ。他にいっぱい席空いているはずなのに、なんでわたしを起こして前に座るのよ)

淳一より少し背の高そうな男は、屈み込むようにして斜め前の席に座った。

(ひよつとして、怪しい男かもしれない。わざわざ人の前に座るのだから。隙を見せないようにしなくては……)

短く刈られた頭髮の量は多そうだったが、所々に白いものが光っていた。眉毛は濃く、奥目の瞳はトロリとしている。

里子は再び他に客がいるかどうか、背筋を伸ばして捜してみた。前の方の座席にショートカット

ろう)

里子は水滴で曇っている車窓に顔を向けて考えていた。窓ガラスに男の横顔が映っている。鼻が高くて、わりと掘りの深そうな造作だ。

(いったい何を考えているんだろう。早く眠ればいいのに……)

里子は自分の顔が窓に映らないように背もたれの方へ体を引いていた。

「お店からの帰り？」

眠るはずだった男がだしぬけに口を開いた。

「お店？」

里子は何のことかわからない。

「あなた歌上手でしょう」

の頭が一つ覗いていた。やれやれであった。どこから乗ったのか知らないけれど、何かあれば、助けてもらえるかもしれない。

「あのう、すみませんが、屋島に着いたら、起こしてもらえませんか」

「……………」

里子の警戒心などまったく知らぬげに、男は馴れ馴れしそうに言った。

(この男、やはりおかしい。寝ている客を起こしておいて、自分が寝ようなんて、どうかしている。

それにわたしがどこで下車するかも聞かないで起こして欲しいだって……。こんな男の寝顔なんて見たくもない。そうだ眠ってしまったら席を替わ

「歌？」

どうやら水商売の女性に間違われていることに、里子はようやく気づいた。

(この男、いったい何を考えているんだろう)

眠るはずの男の顔をチラッと盗み見たら、こつちをじっと見ていた。

「あなたって、哀愁のある歌が似合いそうだなあ……………」

うっとりしたような声で男は言った。

(ひよつとして酔っ払い……)

「歌なんか、うたわないです」

里子は苛立つてきた。

(今度話しかけてきたら無視してやろう)

「お店の名前は？」

「……………」

里子は再び顔をそむけ、車窓にできた露を眺めていたが、どうしたことか急に茶目っ気がわいてきた。

（退屈まぎれに男の戯言に乗ってやってもいいか。時間はたっぷりあることだし……）

そんな考えが過る。

「……はまゆう」

里子はわざとけだるそうに言った。

もちろん口からでまかせであったが、言ったあとで『はまゆう』は、淳一の叔母がやっている居酒屋だったことに気づく。

「海の近く？」

「ええ、店内から海、見えるわ」

遊び心いっぱいになってきた里子の頭は、難なく想像の世界へと入り込んでいく。

近頃巷で流行っている歌が流れる酒場で、里子は紺の着物を着て客の皿におでんを入れたり、酒の注文を聞いたりしている。その店は『はまゆう』かもしれない、違うかもしれない。自分で作り出した空想の店で、かいがいしく働く姿に里子が酔って、口元をゆるめていると、

「あなたって、着物が似合うでしょうね」

突然、男が酒場のドアを開ける。

「さあ、どうかしら」

最近、着物に袖を通したのは、子供の入学式か、親戚の結婚式に出席したときくらいだった。

「いいなあ、あなたのような人がいるお店。その

お店ってどこにあるの？」

「大店のほうよ」

やはり叔母の店がある場所を里子は言った。

漠然としていた酒場の様子が、頭の中で次第にはっきりしていくような気がしてきたが、それと同時に大きな間違いをしたことに気づいた。

大店は高松にあるので、お店からの帰りにはならない。帰りになるには、酒場の場所をすでに通過してきた街にしなければいけなかったのだ。

（ああ、どうしよう。嘘がばれて、遊びはここま

でになってしまふ。せつかくおもしろくなつてき

たのに……）

里子が、頭をフルに回転させていると、

「はまゆうって、いい名前だなあ……」

彼はもうこつちを見てなくて、ぼんやり虚を見詰めていた。

（この男、やはりどこか変なのではないか。それとも頭が悪いか、酔っているのか。私の誤りに気づかないなんて。もしかして本当に悪い男なのかもしれない。嘘に気づいているのに気づかない振りをしている……。顔色もよくないし、何か企んでいると思えばそう見えなくもない）

里子は失言がばれなかった安堵感に浸る間も

なく、逃げる心の準備をはじめなければいけなかった。まず、さきほど見えていた前方の座席に頭があるかどうか背筋を伸ばして確かめる。

(大丈夫。まだショートカット頭は揺れている。

でも、あれは男なのか女なのかわからない。

常識のある人間だったらどちらでもかまわない

けれど、もし男性で目の前の男と同じような

種類の人間だったらどうしよう……)

急に寒気がしてきた。

(せっかく変身した自分にうっとりしていたの

に、なんてことだ。この列車、何両編成かわから

ないけれど、ショートカット頭も怪しい男だっ

たらいけないので、もしものときは、できるだけ

前の車両に逃げ、運転手に助けを求めよう)

里子は男の横顔を盗み見ながら、いつでも席

を立てるように膝にかけていたコートをそうつと

何気なく着た。

「なんだか足元も冷えるわ……」

こっちの警戒心を見透かされないように言い、下

げていたブーツのチャックも上げた。

(これで準備完了)

男の様子を窺いながら、里子は心の中で呟い

た。

(あとは進行方向に向かって歩いていくだけだ。

でも待てよ。刃物なんか持っていて、背後からブ

スリと刺されたら、一巻の終わりになってしまっ

そうだ。次の駅に停車すると同時に移動しよう。

何かあったらホームへ逃げられる。それには迅速

な対応が必要だ。ドアが閉まる直前に、自分だ

けうまく外にでなければ男もいっしよにでて来

てしまうかも。うまくいくかしら……)

急に胸がドキドキしてきて、体中の血液が

頭へ上ってくるようだった。

里子は、まずシオルダーバッグを引き寄せ、いつ

でも肩にかけられる位置に置く。問題は旅行カバ

ンだが、邪魔になったらどこかの席に預けて、忘

れ物として明日、指定された駅へ取りに行けばい

い。着替えや化粧道具より命のほうが大切だ。何

はともあれ、逃げ出すまで何食わぬ顔でいなければ

ばならない。

席を立てたための作戦を着々と進め、やっと

決心がついたときだった。

「なんだか、あなたのことばかり聞いて、私のこ

と話していなかったなあ。実は今日、高松で忘

年会がありました、お酒飲んで、うっかり寝過し

ちやいました。目が覚めたらなんと終点の徳島

でした……」

男はこっちの警戒心になどまったく無関心な

ように喋りはじめた。そして何を思ったか上着

のポケットから名刺を取り出し、里子にくれた。

それを見た里子は、あつと思つたが、黙ってい

た。フェリーの船員だった。

「一等航海士、宮川竜……。夫と同じ職業だ。さつきまでの緊張が急に解けて、この宮川という男に、なんとなく里子は親近感を覚えてきた。」

「昔は外国航路に乗っていたんですが、リストラに遭いましてね、今はフェリーに乗っています。外航の頃にお酒練習したんですが、今だに弱くて、すぐに寝てしまふんですね。でも、あの雰囲気が好きで、誘われると断れなくて、つい、ついて行ってしまいます」

宮川の身の上話は、里子を再び居酒屋のカウンター越しにいるような気分させた。

「船員さんも、最近はいろいろ大変らしいですね」

「よく知ってますね」

引田だ。香川県に入っている。振り返ると、宮川も車窓を覗いていた。

「引田か……。こうしていると時間が経つの、早いですね」

相変わらず宮川の顔色は悪かったが、頬に少し赤みがさしてきた。

里子はやれやれと胸をなで下ろしたい気持ちだった。もしここで降りていたら、泊まるところもなく困っていたところだ。以前にこの駅で降りたときの記憶では、繁華街まででるのかなり距離があったように思う。

（何はともあれ、これでゆっくり座っていられる。しかしまだ油断は禁物だ。夫と同業者だからと

ええ、夫から、と口からにかけて、里子は慌てて言葉を飲み込んだ。

「お店にくる船員さんが、悔やんでました」「そうですか」

里子はフウツとため息をつきたい思いだった。

一刻も早く逃げられるように通路の方へ寄せていた旅行カバンを元の位置に引き寄せ、シヨルダバッグからハンカチを取り出して、額の汗を抑えた。

減速しはじめたと思ったら、突然、列車が止まった。どこだろう。

ガラス窓を手で拭いて、里子は駅名を確かめた。

「行って、いい人ばかりとは限らない」

「雪、雪ですよ」

宮川が街灯に照らされたホームを指差した。

「ほんと、きれいですね……」

ガラス窓は、すぐに曇ってくるので今度はハンカチで拭いた。

（以上6月17日放送分）